

時局と立正安國

——祖山學院雄辯大會優等賞杯受領——

中等部五年 米 村 智 淨

盧溝橋一發の銃聲は極東亞細亞に血腥い風雲を引起し年來叫ばれてゐた非常時日本は爰に一轉いたしまして、

戰時体制へ突撃したのであります。隱忍自重充分培つた皇軍の實力は、向ふ所敵なく、到る所日本精神の花は咲き、會つての爆彈三勇士を凌ぐとも、劣らざる勇壯果敢な肉彈戰は隨所に繰り擴げられております。

銃後の國民又よく一致團結し、それらの赤誠は尊い千人針となり、或は献金となつて、涙ぐましき迄に興奮の坩堝をかきたて、おります。今や空理空論の安價な思想はかなぐり捨て、正しき認識と、強き行動を以て眞一文字に進まなくてはならない秋であります。緊急の場合に於て最もつゝしむべきは、枝葉末節に拘泥する事であ

り、進んでなさなければならぬ事は、最も根本的な一線を死守すると云ふ事であり、

爰に我等は宗祖の立正安國の眞精神を色讀するものとしたしまして、如何なる役割を果さなくてはならぬかを決悟しなければならぬのであります。會つての上海事變に於ける直接導火線が日蓮主義を撃鼓宣令する法師に對する迫害致死であつた事を想起しました時、日蓮聖人によつて提唱された立正安國の指導精神は、六百五十有余年の歲月を母胎として、愈々實質線上に躍りいでたものと見なければならぬのであります。撰時鈔の發頭に於きまして「先づ時を習ふべし」の聖訓を拜しました我等は「今や正に是れ其時なり」の感を深うし、日蓮教徒

の獨占舞臺に亂舞しなくてはならないのであります。

謂ふ所の根本的運動、即ち正しき認識の上に立つた日蓮主義の運動、掘り下げていふならば立正安國の精神運動こそ、我等教徒のなさねばならぬ最大要務であります。

これ即ち銃後に於ける日蓮門下の使命であり、君に忠であり、宗祖に奉仕する所以のものと確信する次第であります。然しながら、立正安國とは單なる文字であつてはならないのであります。金殿玉樓の床の間を飾る額であつてはならないのであります。それは大衆の中にあつては生活の息吹の中に織りこまれては歡喜と安住の泉となり、國家にあつては國威顯揚の指導原理となり、世界にあつては四海同胞の人類愛の基調とならなければならぬのであります。これを要約すれば、社會正義と國際正義の根本思想となるのであります。我々は墮落せる葬式讀經、佛教の形骸を蹴飛ばして、爰に生ける明朗な潑刺たる佛教運動に参加しなくてはならないのであります。「日蓮が弟子檀那は臆病にては叶ふべからず」。よし此

の運動の爲に我等は生活をおびやかさるゝも、命危しとするも、それは只天諸童子以爲給仕の金言を信じて、躍進をつとげなくてはなりません。彼の東洋の聖雄、ガンヂーのあの熱烈な愛國運動を見よ。今や印度三億の民衆はガンヂーの爲に生き、彼の爲に死す決意を以て、貪婪飽なき英國の重き鐵鎖に足を引きづりつゝ、鞭打たれながらも、無抵抗主義の抵抗をつとけてゐるではありませんか。彼等三億の民衆は劍をとりたくも現在の處それは出來ないのであります。武器は勿論、大きなナイフでさへ手に入らないといふ有様であります。然し乍らガンヂーの精神は、たとへガンヂーが死すとも永久に印度民族の血の中に止り、成長し、やがて幾年かの後には、世界歴史に特筆大書さるべき聖なる復讐戰を展開するに相違ありません。仄聞する所によればガンヂーも法華經を信じまわらぬ舌をあやつり乍ら題目を唱へて居るといふ事でもあります。されば吾人は光は東方よりの掛磔も、近きにあると信じて疑はないのであります。

我等は爰に於て、立正安國の指導精神を植付けて先づ東洋の獨立平和を獲得しなくてはならないのであります。暴風の後に風が來る様に、先に上海事變は好轉して、日滿の友邦關係を生じ、今時盧溝橋一發の銃聲はやがて北支に明朗な交歡の爆笑の響と變る事でありませう。

要之、立正安國の指導精神は東洋の平和、牽いては世界平和の根幹となる事を信じ、今や時來るの秋、我等教徒よ奮起せよ、我等教徒よ奮起せよと、吾人は高く／＼絶叫して降壇する次第であります。

